

エフ・アイ・アール・エス・ティー ～陸上競技部・自分なりのゴールを目指して走った日々～ 神谷 茂 (44回)

今でこそジョギングブームが高まり、マラソンを含めた陸上競技に関心を抱く人は多いが、筆者が東高陸上部に入った1968年当時、陸上は人気がなく、陸上部はマイナーなクラブであった。同期の部員数は5名にすぎなかったが（写真に写っていない部員は市川真人君）、3学年合わせて15名程度の所帯でよくまとったクラブであった。テニス部と陸上部は野球部バックネットのあった場所の裏につくられた第二グラウンドで練習を行っていた。顧問の石橋栄一先生の厳しい号令の下、小さなグラウンド（周囲200mもなかったと思われる）を10周ほど回るアップから練習が始まる。その後、80m程度の直線距離のダッシュを10本ほどこなし、それぞれの専門の練習に移ることになる。筆者は中長距離を専門にしていたため、第二グラウンドを使つての周囲練習を淡々とこなした。「ただ走るだけ」の練習は苦しい。脇腹が痛くなったり、呼吸が苦しくなる。そんな時、いつも心の中で「エフ・アイ・アール・エス・ティー」をまじないのように繰り返すと、苦しさを忘れ、周回が積み重ねられた。「自分なりの1番」を目指して、苦しい単調な練習の日々を乗り越えたことが、高校卒業後の人生にプラスに作用したことは間違いない。グラウンド練習の後は全員で蓮華寺池、瀬戸ノ谷などの郊外に出て、ジョギングを楽しんだものである。1先輩（植田、大石、加藤、守屋、山下の諸氏）は素晴らしい成績を残し、特に大石先輩は三段跳びで全国インターハイに出場され、藤枝東高陸上部の名前を高めてくれた。筆者が部長となってからは先輩ほどの活躍は出来なかったが、日々の練習、夏の合宿、春

秋の陸上大会などを通して、10数名の部員と共に汗を流し、応援に声を嗶らし、健闘を称え合ったことは若き日の貴重な思い出となっている。顧問の石橋先生には大変細やかなご指導をいただくとともに、ご自宅での奥様のおいしい食事をごちそうになったことも度々であった。陸上部の仲間と「走ること」を通して3年間の高校生活を送ることが出来たのはわが青春の懐かしい思い出となっている。後輩諸君のたゆまぬ努力に裏打ちされた“素晴らしい走り”を大いに期待している。

（杏林大学医学部 教授）



陸上競技部旗を囲んでの記念撮影(1970年撮影)。後列左は顧問の石橋栄一先生。同学年の部員として後列左より3、4、6、8番目に植山司君（故人）、杉村昭彦君、清水義之君と筆者が並ぶ。

部活動小史

JRCの思い出

小野田 陽子 (48回)

昭和47年、JRC（Junior Red Cross 青少年赤十字）に入部したのは女子3人でした。当時、部室は木造で「長屋」と呼ばれ、放課後には個性豊かな先輩方が三々五々集まってきたて話をしていました。なにがJRCなのかよくわからないけれど先輩達に囲まれている安心感がありました。（この部室はこの年の内に壊され、新しい体育館やプールができた）JRCの部室は保健室へ移っていきました。）JRCは人道・博愛の赤十字の精神に基づいて行われる青少年の活動とあります。県内の高校の組織があり、定例会の出席や年に1回の御殿場での合宿がありました。それ以外



現在の部員の活動(学童と一緒にクッキー作り)

は活動は何をやってもいいわけです。「何をやりたいですか」が合言葉でした。花笠音頭や真室川音頭を練習しての老人ホームの訪問、学校の前の川の清掃、点字や募金活動をやったことを思い出します。文化祭の発表では、開設して4年目の牧之原市坂部の重度障がい児の居住施設「やまばと学園」に取材に伺い、障がいのある子供たちが義務教育を免除されていることに驚き、施設の写真パネルをお借りし、学校で展示をしました。文化祭当日、偶然来校した子供さんから「どうしてここに弟の写真があるの」と写真パネルを見て言われ、困惑したことを覚えています。また、常に部員獲得、後継者獲得という懸案事項を抱えていたしたので、放課後、教室にいる生徒によく入部を呼び掛けました。途中から入ってくれた彼らは実にリベラリストでした。私達の学年は男子2名、女子3名となり、次の学年も貴重な後継者男子1名が誕生しました。こうして私達の3年間は過ぎていきました。藤枝東高のJRCの加盟は昭和23年とのもとても嬉しと思います。

（静岡北特別支援学校 事務長）



映画、「赤貧洗うがごとき」に出演して

画家
石神 明治(29回)

私も第29回の卒業です。東高在学中は美術部、演劇部と活躍をしていました。現在は美術団体「美術の祭典、東京展」の運営委員をしています。私の住んでいるところは、茨城県古河市、足尾を源流とする渡良瀬川の下流にあり、本川の合流地点で北海道の釧路湾原に次ぐ面積を有し、狐、狸も生息し野鳥の宝庫でもあります。最近ラムサール条約に指定されました。そこにはかつて谷中村が存在し肥沃な土地で村民はどかで平和な生活を送っていました。そんな平和な土地に百数十年前廃村にまで追い込んだ、あの「足尾銅毒事件」です。その谷中村を救おうと立ち上がった大政治家、皆様に存じの田中正造、古河ではその正造翁の威徳を後世に伝えようと様々な活動して参りました。たまたま、私が白い遺髪を生きておられるに似ていることから正造翁になりすましバレードの先頭に立ち行進をしたり、紙芝居を制作したり、谷中村を望む渡良瀬川の堤防に私の制作によるレリーフの顕彰碑を建設したり、同時に映画製作の話などもまじし、いつしか映画の話が「マタギン」ガラスのうさぎ」など手がけた映画監督、池田博穂氏の知るところとなり本格的な映画製作となりました。周囲の者は谷中の葦原を、土手の上を歩行姿を撮るだけではないの、とさやっていますので監督に直談判し、多少演劇の心得もありまのせてセリフもくささい、まあ向こう見ずな事を言ってもんだと思いましたが既に監督の頭には役作りは出来ていたようです。関東の空風、赤城降ろしの吹きすさぶ



月に水鏡での真夏のシーン等、映画初体験でしたが無事終了して今はいい思い出です。過去に田中正造の映画や芝居はありましたが、この映画は史実に忠実に作られ見応えのある作品になっています。正造翁が明治天皇に直訴してから100年以上たっているのに、水俣事件を始め昨年起った福島原発での経済界と東京電力との癒着、正造翁が生きておられたらこそかし、お嘆きのことでしょう。



藤枝東高という絆

税理士
飯塚理恵 (69回)

私は1996年の卒業です。早いうちで藤枝東高を卒業してからも16年も経つことになりました。自分が高校生だった頃の記憶は今も鮮明で、ほんの数年前のこのように感じます。高校時代は剣道部に所属していました。毎日の練習は厳しく、けれど仲間と一緒にそれを楽しめることの楽しさが辛さより

も遙かに優っていたから、3年間がとても有意義な時間であったと思います。仲間と一緒にたくさん笑ったこと、泣いたこと、とにかく毎日が一生懸命の連続だった気がしています。そして、その時間が今の私の根幹とでもいべきものを造ってくれたように感じています。きらきりと輝く未来に向かって進む力を与える、藤枝東高校の持つ風土というかそういうものが確かにあの場所ではあった。それをたくさん吸い込んだのが私達です。卒業してからもずっとその精神の下で生きているのだということを今でもふと思い出したように感じます。3年前に藤枝市で税理士事務所を開業させていたから、藤枝市内外で活躍されるたくさんの方にお会いさせていただいておられます。驚いたのは活躍なさっている方々の中に藤枝東高校の卒業生の方の多さです。そして、みなさんの温かさ、一人きりで仕事を立ち上げて右も左もわからず、ただただ奔走していた私を、初めてお会いするずっと年上の先輩方、そして後輩達が世代を超えて藤枝東高校という一つの絆で繋がった仲間として温かく迎え、支えてくださったこと、本当に本当にありがたう感じました。私に、絆という言葉の意味を教えてください。





志太中とサッカーと私

甲賀 正三 (3回)

私は大正15年に志太中に入学した。大正はその年で終わりと昭和になった。学校は出来たばかりで全校生徒、300人足らず、5年生はまだおらず、3年生が一番多かった。入学の時皆サッカー靴を注文した。通学もサッカー靴だった。初代銅織校長先生は、吾が校はサッカーを校技とすると宣言した。英国の名門校、オックスフォード、ケンブリッジはサッカーによって、ゼントルマンの気風が養成された。吾校もサッカーによってゼントルマンを作るのだということだった。ひまさえあれば、ボールを踢って遊んだ。グラウンドには草がはえ、大きな石がごろごろしていた。放課後や休みには穴を掘って石を埋めたり草取りをした。私は卒業後、福井高専に入学した。ボールをさわったことがあるという理由

で選手になった。北陸ではサッカーをやっている学校はなく練習試合は名古屋まで。社会人になって、日立に入社してからも50才近くまでサッカーをやった。私は子どもの頃はからだで弱く病気がばりしていた。志太中にはいつ、5年間焼津市越後島から学校まで、往復10キロ近く歩いて通ったこと、生涯サッカーをやったおかげで長生きできたという気がする。ただサッカーのおかげでゼントルマンになったかどうか、自分にはわからない。今や志太中の同窓生は2万4千人を超え、世界を舞台に活躍しているのを見ると、身のふるえるような感動を感じる。中山選手、長谷部選手、村松選手とは会ったことも、話したこともないが、私は勝手に息子や孫のような気になってい。仲々いい気分である。



農耕文化と狩猟文化

静岡市経済局商工部
観光・シティブロメーション課
観光コーディネーター
塚本 恭丈(43回)

同窓会員を相手にサッカー論を展開しようなどという大それた考えは毛頭ないが、前職時代における通算10年に及ぶ米国、イタリアでの滞在、また、国際機関事務総長として訪れたアジア各国での体験から感じただことしたためてみた。

本稿を執筆しているのは、ロンドン五輪サッカーの余韻が未だに色濃く残る8月下旬。それにしては男女とも日本代表チームは強くなったものである。日本がメキシコ五輪で銅メダルに輝いたのは高校2年の時であった。折しも我々は修学旅行で東北を巡るバスの中であったが、試合の様子はイヤホンで中継を聴く同級生から逐次流れた。中継に一喜一憂する我々に胸に母校を訪れた山口芳忠、富沢清司両氏のややはにかんだ顔などが今でも懐かしく思い出される。永年日本サッカーの課題とされてきた「シュートの精度」「ペナルティエリア内での切り込み」「ボールへの寄せ」は今でも指摘されることであるが、この背景には単に日本サッカーの歴史が欧州などに比べて浅いということだけではない。何千年と続いた農耕文化の影響があるように思えてならない。昭和40年代頃まで続いた4メートル程の定期に5、6名が横一列に並び、同じリズムで苗を植える田植えスタイルが、同じリズムで一人が遅れても早過ぎても作業が成り立たないから、常に歩調を合わせる必要が要求される。流石に機械化が進んだ今日ではくさんの方式はなくなつたが、否が応でも他と歩調を合わせなければならぬ風潮は現在でも「衣替え」、或いは「クルビズ」の慣習に窺うことが出来る。農村に限らず、個よりも全体、「連帯責任」、「出る杭は打たれる」という考えでは日本全体に色濃く残っていると思われる。一方、欧米、とりわけ、欧州のサッカーはさまざまなメンタリティを彷彿とさせる。ボールを持つ選手の周辺には固い選手の存在があり、時には驚くほどバハンを切り込んで行く。最後にシュートを打つ者も高い精度で枠内に放つ。首尾よく槍が当たれば彼の分け前は一番多いであろうが、外せば一失即喪を喫らせてしまう。日本のプレーは欧州が悪いというのではない。現に同じラインに並んで行う田植えは、日本が得意とするオフサイド・トラップそのものではないか。当たりのことながら、同じ組織プレーでも欧米と日本では根幹に流れる文化が違うのではないか。今、これまでの日本にはない新しいスタイルを見せるU20の「ヤングチーム」の動きに注目しているところである。



恩師を訪ねて

萩原 昌明先生
在職Ⅱ昭和39年4月～52年3月、平成3年4月～6年3月

高度経済成長の終盤期に一般教諭として、バブル崩壊直後の平成ひとけた期に校長として、2度にわたり、東高の教壇に立った。出身校は東高。いつても清水東高。ところが、言葉の端々からわれわれと同じ「東高愛」に満ちていることがうかがえ、同窓の士では「と錯覚するほどだ。父親の影響で教師を目指し、東京教育大（現・筑波大）国文科に進学。卒業と同時に昭和31年4月、上河津村（現・河津町）にあった、福取高上河津分校に国語教師として赴任した。本校の福取は県立だが、分校は村立という変則スタイルで、しかも農業科単独の定時制だった。ここで、地元の農業を志す生徒たちと生活をともにし、1年半後、掛川西高に転出。ここでは、名門の野球部にかかわって監督も務め、甲子園を目指して采配を振った。東高にやってきましたのは39年4月、35HR（3年5組）のクラス担任になり、部活動は大学時代の経験を生かして空手部の顧問を引き受けた。従って、硬派と受け取られがちだったが、根はどことなく温和な者。32年の静岡国体で優勝したことが、サッカー部の戦後の第1期黄金時代とすれば、赴任した39年は第2期黄金時代の真っただ中。冬の全国選手権で2連覇した直後で、赴任1年目に開催された新潟国体は準優勝と、常に全国区の存在であり、「サッカーの藤枝東を羨望した」と語る。

授業や部活動の指導とともに、心掛けたのが「職員間の融和だった」と振り返る当時「職員室でサッカー部に代表される運動部の活性化を図ろうという機運が高まった。一方で、有名大学への進学率を向上させ、進学校としての位置付けを確固たるものにしなければ」との声も強まり、部活動推進派と進学推進派が激しくせめぎ合っていたという。サッカーだけでなく、剣道、バスケットボールなども実績を残し、進学面も右肩上がりの傾向が顕著になり、「周囲は文武両道の藤枝東として高く評価されたが、その実はせめぎ合いの結果だった」といい、両派の「融和」に努めたのが忘れられない」とのことだ。2度目の赴任は平成3年4月、今度は校長としてやってきた。まず、手掛けたのは校風の振興。すなわち「部活動の振興だった。14年ぶりに戻ってきて、「部活動だけでなく、学校が小さくまとまりかけている」と痛感したからだ。翌年、サッカー部が全日本ユース大会を制し、21年ぶりに全国の頂点に立った。それが（校風振興に対する）答えとはいえないかもしれない。ただ、いま振り返ると少し元気になったよう気がする」と結んだ。



「東高時代の思い出と今」

キリン中国投資有限公司
董事長
渥美 志郎(50回)

やっ、藤枝東大会優勝。1976年4月の話です。当時はまた野球のマウンドがグラウンドに鎮座していた時代、奥のスポンサーという大会がありました。強豪校のサッカー部は出場しない大会で、我が東高も校内予選を勝ち取った3学年選抜チームが出場した次第です。（前年は私の自殺点で0-1と3年選抜に惨敗。相手チームは皆サッカー部でたくさんの部員が応援する中、こちらはサブの選手もほとんどおらずK君持参のボール1個でシュート練習、外せば自分で拾いに行くという中で